

Centro di Ricerca sulla Pittura Murale Italiana, Università di Kanazawa

Newsletter

金沢大学 フレスコ壁画研究センター

Vol.7

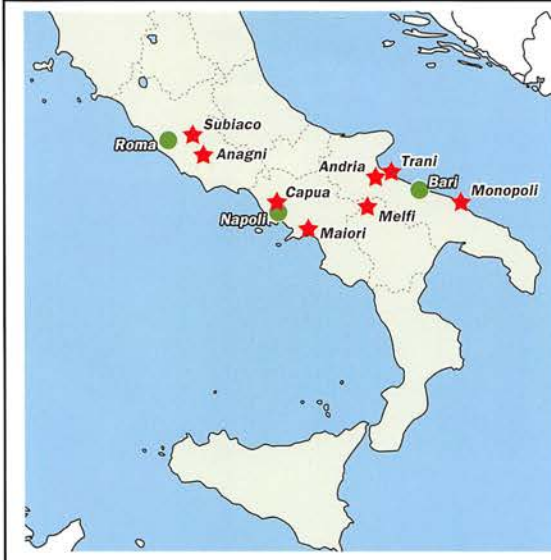
September 2013

- ◆ 特集 [南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト]
第7回現地調査：ラツィオ州/カンパーニア州
バジリカータ州/プーリア州
- ◆ [写真展&講演会]
ルネサンス美術の源流を求めて
- ◆ [サンタ・クローチェ教会壁画修復 追加プロジェクト]
完成記念式典
- ◆ 研究者の横顔 第7回
壁画は己の前に立ちはだかる壁に描かれた絵である
- ◆ コラム第7回 私のおすすめフレスコ壁画
アッシージで聖フランチェスコの魂と出会う
- ◆ レポート 伊豆の長八美術館を視察
- ◆ 連載 フレスコ八景 第七景 ヴァティカン市国
ヴァティカン博物館「ボルゴの火災の間」



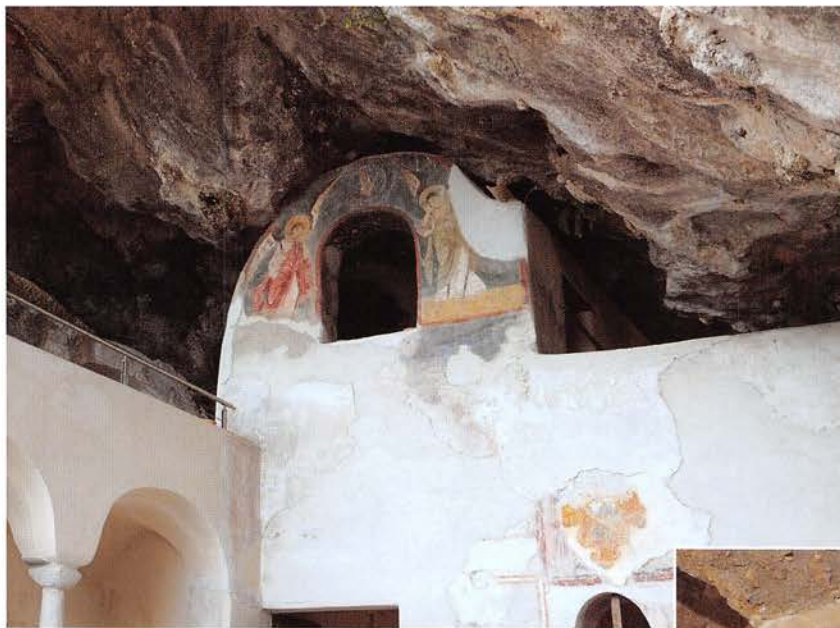
特集 [南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト]

第7回現地調査：ラツィオ州：スビアーコ、アーネ
カンパーニア州：カプア、マイオーリ
バジリカータ州：メルフィ
プーリア州：トゥラーニ、アンドリア、モノポリ



2013年1月、第7回目となる現地調査を実施しました。今回はプーリア州だけでなく、南イタリアの4州（ラツィオ州、カンパーニア州、バジリカータ州、プーリア州）に調査範囲を広げ、全部で11ヶ所の教会を現地の文化財監督局の協力で調査しました。ただし、これまでもそうでしたが、調査対象のすべてが「洞窟教会」ではありません。本プロジェクトの研究対象は洞窟教会に描かれた中世壁画ですが、南イタリアの中世壁画の研究にあたって図像様式的に重要かつ参考となる作例については、たとえ描かれた場所が洞窟教会堂内の壁面でなくても、私たちの研究には不可欠だからです。南イタリアといっても、1月はやはり真冬であることに変わりはなく、毎日が青空に輝く太陽に恵まれたわけではありませんでした。しかし、寒風吹き抜ける洞窟教会の中で8世紀もの長い歴史を生き延びてきた「祈りの壁画」を目の前にすると、自然に熱いものが胸の底からこみ上げてきます。

以下に、私たち調査チームの印象に強く残る教会や壁画のいくつかを写真アルバムで紹介します。



3階構造の修道院の最上階に設けられた小礼拝堂



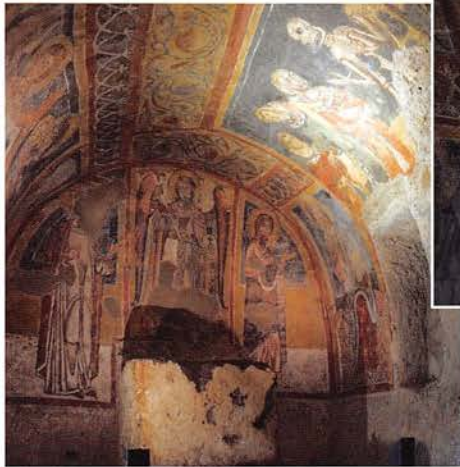
修道院のテラスからはアマルフィの海が見える



修道院内にのこる11世紀中頃の壁画

マイオーリ
MAIORI

サンタ・マリア・デ・オレリア修道院



大天使聖ミカエルの礼拝堂



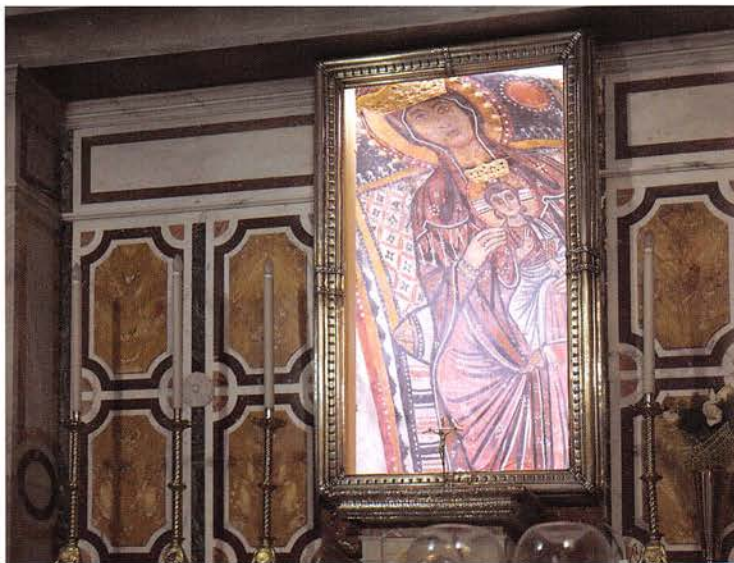
礼拝堂内に描かれた13世紀の壁画
「三人の生者と三人の死者の物語」

メルフィ MELFI

サンタ・マルゲリータ教会



主祭壇のある後陣にはアンティオキアの
聖女マルゲリータ伝などが描かれている



14世紀の壁画断片「奇蹟の聖母」

アンドリア ANDRIA

サンタ・マリア・デイ・ミラーコリ教会



地下礼拝堂にのこる壁画

モノーポリ MONOPOLI

サンティ・アンドレア・エ・プロコピオ教会



アッスンタ峡谷に沿って
掘削された洞窟教会



堂内には11-14世紀の壁画がのこる

[写真展&講演会]

共催：市民工房うるわし

「ルネサンス美術の源流を求めて」 ～南イタリアの中世洞窟教会群に描かれた壁画調査～



講演会前のギャラリートークで写真パネルを解説

松任駅前にある「市民工房うるわし」の2階ロビーで、本センターが2012年度に実施した南イタリア洞窟教会壁画調査に関する写真展を2月16日～3月8日まで開催しました。近代的な市民工房ビルの正面玄関上のガラスに貼られた「中世の聖人像」は、グラヴィーナ・イン・プーリアの洞窟教会に描かれている13世紀の壁画を撮影した高精細写真を原寸大で印刷したものです。それが松任駅前を往来する多くの人々の心を捉えたのでしょうか、「市民工房うるわし」のデータによれば、写真展の入場者は7,000人を超えたとする盛況ぶりでした。

3月2日に開催された宮下孝晴センター長の講演会では、「進化する中世の壁画技法の先にルネサンス美術の誕生があった」と壁画調査の目的が語られ、本センターが進めている壁画のデジタルアーカイブ（調査診断と詳細な現状記録）が紹介されました。



正面玄関に貼られた聖人像



耐震構造スペースを洞窟教会に見立てた原寸大写真の展示

イタリア美術の奥深さ

白山市市民工房うるわし工房長 山瀬晋吾

JR新松任駅自由通路展望台から、真正面に見える5階建てビルが白山市市民工房うるわしです。この工房を予察に来館された宮下孝晴先生が、松任城址公園を見渡せる2階ロビーから常設展示室につながる空間配置の機能性に着眼され、即座に南イタリア中世壁画調査の写真展と講演会開催が決まりました。当工房にとってこの空間での学術的な催しは初めてでしたから貴重な体験となり、市民にとって願ってもないときめきの機会となりました。

まず写真展で最も惹かれたのは「近年発見された教会東壁に描かれている三聖人」（実物大）でした。館内むき出しの耐震構造部分を逆に洞窟と見立て、聖人たちの親しみのある素朴な表情を披露して頂きました。特に聖ニコラウスの髪、眉、目、鼻、口、髭を表す漆喰上の刻線の凹凸を、レーザー光スキャンにより再現された模型を触って実感できましたから、中世の画工たちの息遣いまで伝わる思いがしました。私が近年手がけている陶彫作品の中で、粘土板上の刻線や盛り上げ部分に陶磁用の絵の具で彩色している技法につながりを感じて嬉しくなりました。

つぎに3月2日開催された宮下先生の講演会では、現地調査で駆使された様々な撮影機や計測器により三次元で記録されたデジタルアーカイブの実際を、スライドを通して分かりやすく解説されました。参会者一同2時間ぶっとおし、固唾を吞んで視聴させて頂きました。中でも、岩盤ごと切り取られて博物館入りしているサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画を、現教会の壁に戻して見せてもらった動的な映像は、いままさに現場で見上げていると思ったほど新鮮でした。

このように宮下先生が主宰される金沢大学フレスコ壁画研究センターのあくなき探究心のお陰で、受講生の皆さんがイタリア美術のさらなる奥深さに感じ入ったに違いありません。



講演会

[サンタ・クローチェ教会壁画修復 追加プロジェクト]

完成記念式典

サンタ・クローチェ教会 フィレンツェ 2013.6.12



修復を終えた「聖フランチェスコの聖痕拝受」(部分)
 ジョットの原作とは異なる 1800 年代の修復(セラフィムから放たれた金色の光線)を除去し、原作の当初の表現に還元した

金沢大学とイタリアの国立フィレンツェ修復研究所、サンタ・クローチェ教会の協力による同教会の大礼拝堂に描かれた総面積 820 m² に及ぶ 14 世紀末の大壁画「聖十字架物語」の修復は、完成までに 6 年を要しました。そのプロジェクトにピリオドが打たれる日も近づいた 2009 年 6 月、本センター長の宮下孝晴教授の個人的資産の投入によって、金沢大学は新たな壁画修復プロジェクトを提案、大礼拝堂の周縁に描かれていた 14 世紀初頭の壁画(ジョットによる「聖フランチェスコの聖痕拝受」、フィリーネの画家による「聖母被昇天」など)の修復が翌年に開始されました。大礼拝堂に建設された高さ 26m の修復作業用の足場を左右に拡張する形で継続的に実施されたため、この追加プロジェクトはあらゆる点で合理的意義が認められたのです。連続する壁画に描かれた壁画の修復は、それが可能なら、同一の方法によって同一のスタッフが同一時期に《診断・洗浄・修復》されることが望ましいからです。

3 年に及んだ追加プロジェクトが今年 3 月に完成し、最終的な記録撮影の後、4 月には修復用の左右の足場が撤去され、鮮明に蘇った 700 年前の壁画が公開されました。6 月 12 日、プロジェクトの完成を記念するセレモニーと「修復と成果」に関する記者会見が、サンタ・クローチェ教会内の「最後の晚餐ホール」で開催されました。会場には 100 人を超える関係者と多くの報道陣が

めかけ、最前列には世界的バレリーナとして知られたカルラ・フラッチさん(現フィレンツェ文化担当官)の姿もありました。教会財産管理部代表のステファニア・フスカニ女史の司会でクリスティーナ・アチディーニ女史(トスカーナ州美術館・博物館連合会長)、フィレンツェ修復研究所長のマルコ・チャッティ氏、イザベッラ・ラービ女史(トスカーナ州文化財監督局長)が順に挨拶、イタリア美術に対する 10 年にも及ぶ金沢大学の貢献に感謝の意が表されました。その後、フィレンツェ修復研究所の壁画部長チエチリア・フロジニーニ女史から、今回の修復で発見された新事実や導入した新手法についての学術的な発表があり、この日伊共同プロジェクトの高い意義が明らかにされました。



挨拶するステファニア・フスカニ女史



最後の晚餐ホールに集まった関係者と報道陣



完成を迎えた感激を語る宮下孝晴教授



鮮やかに蘇った「聖母被昇天」

研究者の横顔 第7回

壁画は己の前に立ちはだかる壁に 描かれた絵である

金沢大学 人間社会研究域 教授 宮下 孝晴
(フレスコ壁画研究センター長)

Q.なぜ壁画研究に・・・?

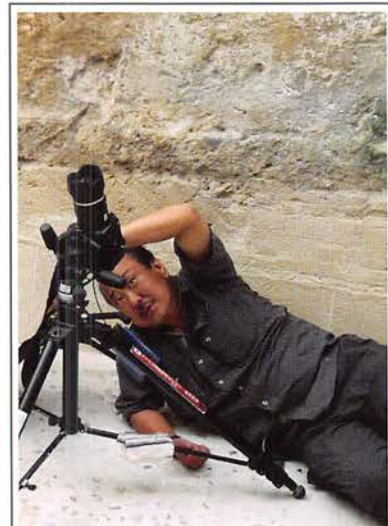
この問いに答えるのがいちばん難しいですね。いくら記憶の糸をたぐり寄せて自問しても、何しろ 40 年以上も昔のことで、自分に都合のいい脚色をしてしまいがちだからです。せっかく美術史を勉強すべくイタリアに留学したのだから、どこにでも移動できる作品ではなく、イタリアにいないと研究できない、イタリアに釘づけの美術、つまりは石の建造物の壁に描かれた壁画に取り組んでみようと思ったような気がします。

Q.壁画研究の魅力とは?

壁画を見る「その場」は、かつて画家が壁に向かって絵筆を揮ったまさに「その場」であり、はかなき時を超えて自分が制作の場に立っているのだという感動が何ともいえません。それに壁画は絵画における「スペクタクル巨編」で、作品のスケールの大きさやそこから生まれる迫力は、額縁入りの絵とは格段に違いますからね。

Q.壁画研究の未来とは?

壁画研究というのは、美術史研究者が独力で立ち向かうにはあまりに巨大ですし、漆喰や顔料などの材料を含めた技法解明がとても大切なので、「壁画が修復される時」が最大の研究チャンスなのです。壁画の修復に際しては、足場を建設して保存科学の専門家たちが傷みの状態や材料、技法などを詳細に分析調査しますから。金沢大学の主導で 6 年の歳月をかけて完成したサンタ・クローチェ教会大礼拝堂壁画の修復プロジェクトは、私を含めた多くの美術史研究者が当初から参加した国際的な研究体制でした。自画自賛のようでもありますが、理想的であったと思っています。これまでの美術史研究は文献中心のもでしたが、壁画に関しては「分析調査と修復」と「美術史研究」の歯車がしっかりと噛み合せて展開する必要があります。プロジェクトの提案からチーム編成、その実現へ向けて常にイニシアチブをとりつつ、自らの研究をも進めていくことのできるプロジェクトリーダーを育成することで壁画研究の未来は拓けると思います。



◇所属: 人間社会研究域 歴史言語文化学系
◇専門分野: イタリアの中世・ルネサンス美術史
◇研究課題: 壁画技法史および壁画の修復と保存

column

私のおすすめフレスコ壁画

第7回 アッシージで聖フランチェスコの魂と出会う

フレスコ壁画研究センター コーディネータ 上口 大介



Photo: Daisuke Kamiyachi

12 世紀の末、聖フランチェスコはアッシージの裕福な商人の家庭に生まれましたが信仰に目覚め、カトリック教会の修道会フランチェスコ会として活動を始め、「従順・清貧・純潔」の 3 つの信念を追及しました。死後、彼の偉業を讃えるために建設されたサン・フランチェスコ教会には、ジョットの作品と言われる聖フランチェスコの生涯を描いた 28 の連作壁画があります。ジョットの作品は従来の形式的で抽象的な宗教的表現から大きく抜け出し、人物の動きや姿勢、表情など、生き生きとした存在感があり、背景には建物や自然を配置することで遠近感のある構図を生みだしており、大胆で新しい絵画表現はルネッサンスの始まりを予感させる新鮮で圧倒されるものです。

地下の聖人の墓に礼拝し、偉大なる魂にふれた後は、壁画の前に何時間もたたずんでしまいます。一連の題材のうち、ジョットは「聖痕拝受」をフィレンツェのサンタ・クローチェ教会にも描いていますが、そちらは聖フランチェスコのあご髭が描かれていないため、口元の表情に聖痕を授かる喜びが表現されており、全体として人間味のある力強い完成された作品となっています。2 つの教会を訪れて双方の壁画を比較するのも楽しみの 1 つです。

2013年1月-6月トピックス & イベント

在イタリア日本国大使の河野雅治氏が 金大チーム調査地のグラヴィーナ・イン・プーリア市を視察



2011年6月のサンタ・クローチェ教会大礼拝堂壁画の完成記念式典にも御列席いただいた在イタリア日本国大使の河野雅治氏御夫妻が、本センターの南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクトに強い関心を示され、ぜひ調査地を訪見たい旨の依頼があったため、グラヴィーナ・イン・プーリア市を御紹介しました。天然洞窟を利用したサン・ミケーレ・デッレ・グロッテ教会、凝灰岩台地を掘削したパードゥレ・エテルノ教会、1957年に洞窟教会堂内の全壁画をマッセッロ法で切断し、ブロック移動して博物館内に復元したサン・ヴィート・ヴェッキオ教会など、洞窟教会の保存に関するさまざまな形態を見ることができる唯一の町だからです。グラヴィーナ・イン・プーリア市では日本国大使の初の訪問とあって、町を挙げてのお祭りのような歓迎であったとか……

吉澤石灰工業(株)技術研究所を視察

本センターのメンバーである五十嵐心一教授の紹介で、栃木県佐野市(葛生)にある吉澤石灰工業(株)の工場を視察、日本における消石灰製造の現場を体験しました。葛生地区は江戸時代から石灰の街として栄えたところ。石灰生産の歴史、同地の三峯地区から採掘される上部石灰岩、ドロマイト、下部石灰岩の化学組成の違い、さらには石灰石から生石灰を経て消石灰が製造されるまでのプロセスを、実際の工場施設を見学しながら勉強することができました。同社の技術研究所では、フレスコ壁画を研究する私たちが基本材料としての石灰に抱えているいくつか

の疑問について話し合いました。また、栃木県石灰工業会館では、佐野市葛生地区が市内の壁画をフレスコ画で彩ろうとしている近年の取り組みを知り、その作品のいくつかを見学しました。



本センターが開発した 色補正プログラムが本学から特許出願

南イタリアで実施しているフィールド調査では、洞窟教会全壁面の高精細の写真撮影を行っています。その際、高い色再現性を得るため、カラーチャート(x-rite社製)を写真に写しこみ、編集段階での色補正ができるようにしています。写真撮影では、太陽光やLED光などの光源の違いやレンズの特性(色収差)による色味の変化が原因で、実際の色とは異なった現状記録をしていると考えられるからです。しかし、カラーチャートを利用したとしても、撮影後の色補正については、まだ明確な方法がありません。カラーチャートの24色のうち数色しか考慮せず、ほとんどが編集者の主観によって手動で調整されているのが現状です。そこで、カラーチャートにある24色すべてのデータを考慮し、論理に基づき客観的に色補正を自動で行うプログラムを開発し、現在本学から特許出願中です。

2013年1月-6月の活動一覧

- 1月 : 2013年度実施の南伊プロジェクトに向けての現地調査
- 2月 : サンタ・クローチェ教会壁画修復プロジェクト報告書出版打ち合わせ (Milano, Ed.Silvana)
: 大塚オーミ陶業(株)と3Dスキャンデータを利用した高精度な複製陶板制作に関する研究交流
- 2-3月 : 写真展&講演会(白山市)「ルネサンス美術の源流を求めて」
- 3月 : 吉澤石灰工業(株)技術研究所を視察
: 伊豆の長八美術館を視察
- 5月 : 『セメント・コンクリート』No.795(セメント協会刊)に論文「イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画に残る消石灰モルタル」を発表(宮下孝晴・五十嵐心一)
: イタリア大使館・イタリア文化会館共催セミナー「文化遺産と考古学: 保存と技術革新」で「サンタ・クローチェ教会壁画の修復と南イタリアでの洞窟教会壁画の調査プロジェクト」発表(宮下孝晴)
: 文化庁文化財部古墳壁画室、奈良文化財研究所保存修復科学研究室との共同企画打ち合わせ
- 6月 : サンタ・クローチェ教会壁画の追加プロジェクト完成記念式典

2013年1月-6月の報道記録

《海外メディア》

- ▼南伊プロジェクトに向けてモノポリで現地調査
2013.1.23 Monopolipress
- ▼サンタ・クローチェ教会壁画修復追加プロジェクト完成記念式典
〔テレビ報道〕 [インターネット報道]
2013.6.12 TGR RAI 3 2013.6.13 Arte.com
2013.6.12 ITALIA 7 2013.6.13 Qui Firenze
2013.6.12 RTV 38 2013.6.13 artelabonline.com
2013.6.12 TOSCANA TV 2013.6.13 intoscana.it
2013.6.12 TVR TELE ITALIA 7 GOLD 2013.6.13 arte.it
〔新聞報道〕 2013.6.13 youtube.com
2013.6.13 Corriere della Sera
2013.6.13 La Nazione



Report

伊豆の長八美術館を視察



長八美術館には、日本が誇る左官職人の伝統の技が生かされている。

伊豆の下田（松崎町）にある長八美術館は、ここで生まれた漆喰^{こて}鑲^{いりえちようほち}絵の名人、入江長八（1815-89）の貴重な作品を収集展示する美術館です。入江長八が独自に開発した漆喰鑲絵は、イタリアのフレスコ壁画に匹敵する多くの要素を備えています。鑲絵とは、生乾きの漆喰壁を巧みな左官職人の鑲さばきでレリーフ状に仕上げ、その上に絵を描いて半立体の壁画として完成させるものです。日本の漆喰は、主材料の消石灰に施工性を高めるための糊（海草の角叉^{つのみた}など）や、亀裂を防ぐためのスサ（麻や藁など）を混ぜ合わせる点で、フレスコ画の下地漆喰とは異なりますが、基本的には相通じる世界です。



「龍」（部分）明治9年作（62歳）



漆喰鑲絵の制作プロセス

連載 フレスコ八景 第七景

1508年、野心家のローマ法王ユリウス2世（在位 1503-13）は2人の天才芸術家を呼び寄せ、ヴァチカン宮殿内で歴史的な大仕事をさせようとして計画しました。1人はシステリーナ礼拝堂の天井壁画制作を任された33歳のミケランジェロ（1475-1564）で、すでに彫刻家としての名声はあったものの画家としては未知数というほかなく、少なくとも壁画制作の経験はありませんでした。ヴァザーリの『列伝』によれば、その背後にはミケランジェロ芸術に心酔しきっているユリウス2世を失望させようとする反ミケランジェロ派のドロドロした企みがあったようです。反ミケランジェロ派の中心人物は建築家ブラマンテで、彼はミケランジェロを芸術家として破滅させようとしてきました。それには経験のないフレスコ画を制作させて恥をかかせるのがいちばんと考え、システリーナ礼拝堂の天井画制作をミケランジェロに任せるようユリウス2世に進言したというのです。

もう1人は25歳の画家ラッファエッロ（1483-1520）で、ミケランジェロに恥をかかせようと企んだ先述のブラマンテにとって、ラッファエッロは同じウルビーノ出身の後輩でした。ローマ法王を口説いてラッファエッロにビッグチャンスを与えることに成功し、システリーナ礼拝堂に続く数部屋（スタンツェ）の壁画装飾が一任されます。現在、私たちがシステリーナ礼拝堂への見学順路にしたがって進めば、ラッファエッロが壁画を描いた部屋は、「コンスタンティヌスの間」、「ヘリオドロスの間」、「署名の間」、「ボルゴの火災の間」となります。



Photo: Takaharu Miyashita

ここでは「ボルゴの火災の間」に描かれた壁画に注目してみましょう。なぜなら、火災現場から必死に逃げようとする人々のイメージは、ミケランジェロが同時期に描いていたシステリーナ礼拝堂の「ノアの洪水」場面から無断借用し、ミケランジェロを激怒させたと伝えられているからです。たしかに左端に描かれた「老人を背負う若者」と偶然ではありえないほど酷似したモチーフを、「ノアの洪水」場面に見いだすことができます。（宮下孝晴）

表紙：サンタ・マリア・デ・オレリア修道院壁画（マイオーリ） 撮影：宮下 孝晴

Centro
Affresco



金沢大学人間社会研究域フレスコ壁画研究センターニュースレター（年2回発行）
編集発行 金沢大学 フレスコ壁画研究センター
〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学人間社会研究域
電話 (076)264-5550/5472 Eメール fresco@ed.kanazawa-u.ac.jp
<http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/fresco/index.html>
定期的にニュースレター郵送をご希望の方は、お名前ご住所と連絡可能な電話番号またはe-mailアドレスを添えてご連絡ください。本ニュースレターの内容を無断転載することを禁じます